

●第十四回新選組書展の課題について

課題①「誠」

新選組の袖章や隊旗などに使われた、新選組を象徴する一文字。例年の課題です。

課題②「躬を大樹公ニ致志願ニ候」

今回の「候文」の課題は、近藤勇が文久三年（一八六三年）五、六月頃に多摩の門人たちに宛てた書状を日野の名主佐藤彦五郎が写したものの（日野市所蔵）からの課題です。

書状は壬生浪士組（後の新選組の前身）が同年五月二十五日に幕府の老中板倉勝静と京都守護職松平容保に宛てて提出した建白書の内容を近藤勇が多摩の門人たちに書いて送ったものです。

「大樹公」とは征夷大將軍のごことで、徳川家茂を指します。また「致」とは懸命に働くことを表します。これより前、幕府は朝廷の求めに応じ、文久三年五月十日を攘夷の決行日と約束しましたが、実行しませんでした。条約を締結した他国への攻撃は軍事的にも国際ルールのにも非現実的であり、幕府ははじめから攘夷の約束を守る気は無かったと考えられています。

一方浪士組では、朝廷との約束を破ることで公武合体が破談になりかねないという危惧や、元々強い尊王攘夷思想を持っていた芹沢鴨の影響、さらには五月十日以降、幕府と対立する長州藩が独断で外国船に攻撃を加えて朝廷から褒美を受けていたことに対する焦りなどもあつてこのような建白書が生まれたものと考えられます。攘夷の実行のため、外国と破約の交渉をする際の（命懸けとなるであろう）使者を任せてほしいという文面からは、国の一大事である「攘夷」の実行に何とかして関わりたいという強い願望を感じることができます。

近藤勇も当時は芹沢派の攘夷思想の影響を受けていたと考えられ、攘夷が実行されないことに対する焦りと憂いを吐露する手紙も本状とは別に残されています。

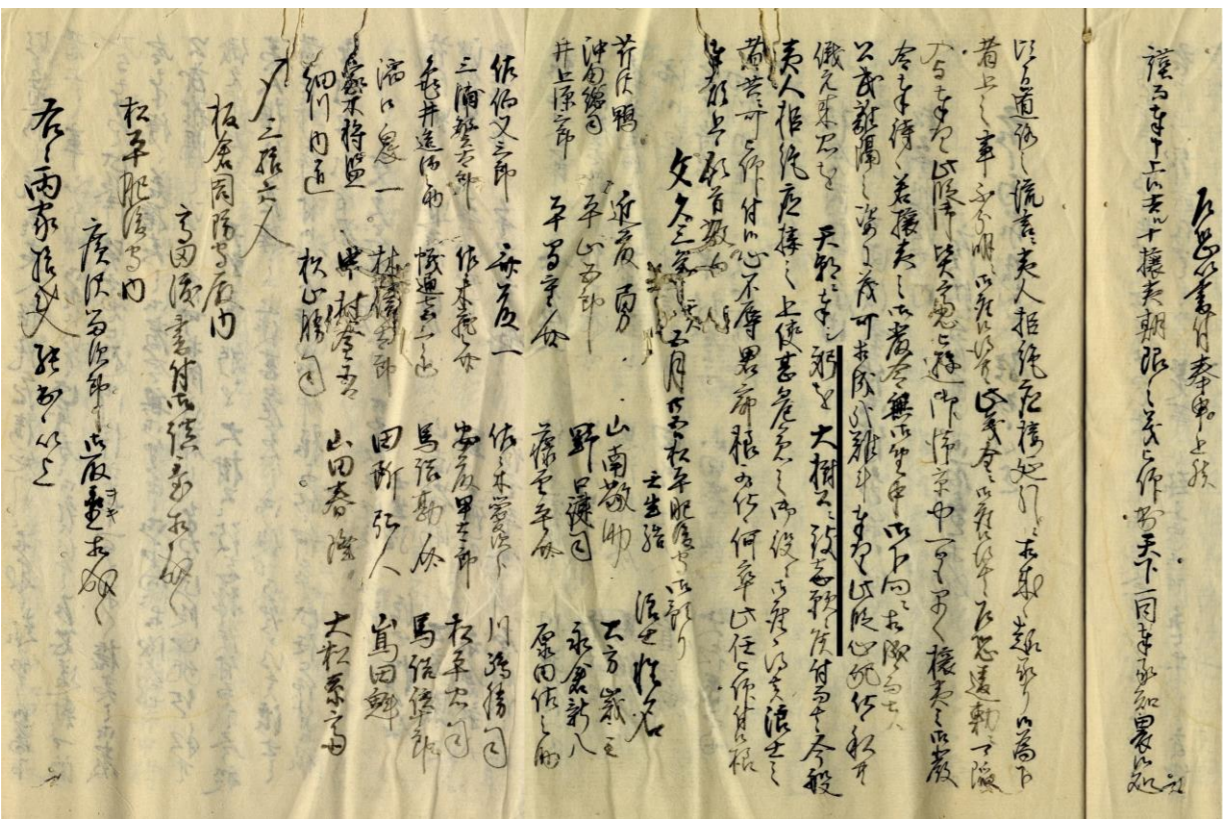
課題③「近藤勇」

前回第十三回新選組書展からはじまった人名の課題です。

第一弾の「土方歳三」に続いては、新選組のリーダーである局長近藤勇を課題とします。

近藤勇は天保五年（一八三四年）、武蔵国多摩郡上石原村（現東京都調布市）の宮川家に生まれ、後に天然理心流剣術の近藤周助の養子となり、近藤勇を名乗りました。

その後門人の土方歳三や井上源三郎、沖田総司らとともに浪士組に参加して上洛しました。新選組を結成し局長となつて京都の治安維持にあたり池田屋事件などで活躍しましたが、鳥羽・伏見の戦い（近藤自身は負傷のため参戦せず）や勝沼（柏尾）の戦いで敗れた後、下総国流山（現千葉県流山市）で新政府軍に捕らえられて処刑されました。



浪士組建白書 大意

去る五月十日が幕府の攘夷決行日だったのは天下万民が知るところです。（が、実行されなかったため）攘夷決行は無期延期になってしまふという噂が広まつており、我々下々のものには上の考えは分かりかねますけれども、このことは恐れながら帝の御意志に背くことになつてしまふのではないかと危惧しております。

是非將軍様が在京のうちに一日も早く攘夷の命令を下されるようお願い申し上げます。

もし攘夷が行われないまま將軍様が江戸に戻つてしまわれたら、公武合体も瓦解してしまふのではないかと心配しております。

我々浪士組は帝に忠義を尽くし、幕府・將軍のために命懸けで働くべく浪士組に志願いたしました。ですので、異国との破約交渉の折にはぜひとも我々に使者をお任せ願いますようご命令をいただきましたいと存じます。

文久三年五月二十五日

松平肥後守御預

壬生詰 浪士姓名

芹沢鴨 近藤勇 山南敬助 土方歳三

（以下浪士組士連名略）

板倉周防守（勝静）殿

松平肥後守（容保）殿

課題文前後の読み下し

（※太字部分が課題文）

若し攘夷の御殿命御座無き中で御下向に相成り候いては、公武離隔の姿にも相成るべきかと計り難く存じ奉り候。私共の義は元来、忠を天朝に奉じ、**身を大樹公に致し志願に候。** ついては今般夷人拒絶の応接の上使は甚だ危急の御役に御座候えば、浪士の者共に仰せつけらるべく候。

近藤勇書状写（文久三年（一八六三年）六月頃写） 日野市所蔵

※傍線の部分が課題